

学内広報

2004. 3. 10
 東京大学広報委員会

東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、 留学生支援団体等と総長との懇談会



(3 ページに関連記事)

目次

広報委員会 (東京大学の法人化に関するQ&A) …	2	部教職員と留学生・外国人研究者との懇親会、東京大学生産技術研究所合同講演会「リサーチインテグレーションと産学連携」開催される、東京大学物性研究所所内技術職員研修「安全管理・衛生管理技術関係」行われる、博物館公開セミナー「石の記憶」展にちなんで	
一般ニュース ……………	3	掲示板 ……………	12
戸田橋艇庫竣工式が開催される、東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会、「東京大学外国人留学生スキー講習会」開催される、2003年度冬学期留学生センター日本語教育集中コース・特別コース (第37期生) の修了証授与式行われる		東京大学法科大学院開設記念連続公開講演会「司法制度改革のゆくえ」第4回	
部局ニュース ……………	9	事務連絡 (人事異動 (教官) (事務官)) …	13
退官教官の最終講義、理学系研究科・理学		淡青評論「生命融合科学と世界の中の東大」…	16

≡ 広報委員会 ≡

東京大学の法人化に関する Q & A

Q： 法人化すると労働安全衛生法が適用になるとのことですが、それはどのような法律ですか。

A： 労働安全衛生法は、労働基準法と相まって、労働に従事する人の労働にともなう災害や健康障害を防止し、快適な職場環境の形成を促進することを基本として設けられた法律です。この法律は、例えば作業場において使用される化学物質による健康障害を防止するために必要な設備や化学物質の空気中の濃度の管理基準を示すなど、労働災害を防止するための危害防止基準を確立し、さらには責任体制を明確化することを明記しています。実際には、この労働安全衛生法は、さらに労働安全衛生施行令、労働安全衛生規則、有機溶剤中毒予防規則、作業環境測定法など、20以上にのぼる関連法規により体系づけられており、これらの法令に基づいて、労働者を雇用する事業者に対して、労働者の安全と健康を守るための様々な監督、指導をおこなう権限が労働基準監督署に附与されています。

Q： これまでの東京大学の教育研究業務に関する安全と健康を守るための法律や規程は今後どうなるのでしょうか。

A： 国立大学の国家公務員に対しては、一般の法人に対する労働安全衛生法に相当するものとして、昭和48年に施行された人事院規則10-4「職員の保健および安全保持」が適用されていました。その内容は、若干の相違点はあるものの、多くが労働安全衛生法で定められた事項を踏まえたものでした。実際に、東京大学で定めた「東京大学職員の健康安全規程」でも、この人事院規則に準じた教育研究業務には安全と健康を守るための種々の規程が定められていました。

国立大学法人化後は、労働安全衛生法およびその関連法規に対応した「東京大学教職員の安全衛生規程」が新たに制定されます。労働基準監督署による監督・指導もより明確化されます。その意味からも、これまで以上に、大学においても法令や東京大学の規程を遵守した教育研究活動が求められます。

Q： 労働安全衛生法が適用されると、東京大学における教育研究業務に具体的にはどのようなことが要求されてくるのでしょうか。

A： 例えば、理系の実験室などでは、普段使用している実験用試薬の多くは、労働安全衛生法で人体に有害性のある化学物質として指定された有機溶剤や特定化学物質です。労働安全衛生法は労働にともなう災害や健康障害を防止することを重要な目的として定められた法律ですから、これらの有機溶剤や特定

化学物質を使用する場合には、ドラフトチャンバーなどの局所換気装置の設置や、実験室の空気中の化学物質の濃度を測定する作業環境測定、およびこれらの有機溶剤や特定化学物質を使用した実験室を使っている人への特殊健康診断などを行なうことが義務付けられています。また、実験に用いる局所排気装置やオートクレーブ機などの機器の安全性を定期的に自主点検し、その記録を3年間保存することも義務付けられています。

このように、労働安全衛生法が適用されることにより、東京大学における教育研究業務にも、これまで以上に法令に基づく厳格な対応が求められることになります。

Q： 労働安全衛生法は労働者の労働災害や健康障害を防止するための法律とされていますが、学生の安全や健康管理には無関係なのですか。

A： たしかに、労働安全衛生法は、働く人と、雇用する事業者に対して、安全と健康を守るために定められた法律です。もし学生が実験中に化学物質により健康障害を被った場合などには、労働災害とは認められず、労働基準監督署の調査や指導などを受けることはありません。しかし、大学では、教職員と学生が一体となって教育研究に携わっているのが現実であり、労働安全衛生法が学生を対象にしていないからといって、安全衛生管理の対象から学生を除外するというのは、不適切です。

東京大学では、労働安全衛生法に対する対応においても、常に教職員と学生を一体化して安全衛生管理を行なっていく姿勢で臨む方針です。たとえば、安全衛生教育は、教職員だけでなく、必ず学生の皆さんにも受けていただくように企画します。また、労働安全衛生法で指定された有機溶剤や特定化学物質を使用した実験室を使っている人への特殊健康診断についても、教職員だけでなくその部屋で実験に携わっている学生も対象に行なう方針です。これらの対応は、学生の安全と健康を守るというだけでなく、学生の皆さんが、大学を出て社会で活躍するするために、労働における安全と健康管理の意識を育てるという教育的な意味からも、重要なことだと思われれます。

(広報委員会)

≡ 一般ニュース ≡

戸田橋艇庫竣工式が開催される

埼玉県戸田市戸田公園内にある課外活動施設戸田橋艇庫の耐震補強工事による全面改修並びに新艇庫建設工事が、平成15年12月26日（金）に無事竣工しました。今回の工事により機能的な艇庫に生まれ変わるとともに、外観も美しく一新され、より良い環境での合宿が可能となりました。



戸田橋艇庫

これに伴い、平成16年2月13日（金）に本学関係教職員、漕艇部関係者、一橋大学をはじめとした近隣艇庫の大学関係者、施工担当業者及び漕艇部OB等約80名の出席のもと竣工式が開催されました。

竣工式では、古田大学院総合文化研究科教授及び竹田学生部長の式辞に続いて本学漕艇部長である北原大学院農学生命科学研究科教授の挨拶が行われ、山田施設部長から工事計画概要報告を行った後、工事担当業者への感謝状贈呈が行われました。

引き続き、佐々木総長筆による艇庫看板の除幕式が行われ、その後、艇庫内の施設見学が行われました。

祝賀会では、漕艇部員も加わり、約100名が出席し、盛会のうちに終了しました。

(学生部)

東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会

2月17日（火）18時から、東天紅上野店において「東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会」が開催されました。

この会は、本学の学部を卒業または大学院修士課程・博士課程を修了する予定の外国人留学生及び留学生支援団体関係者と総長、副学長、特任補佐、部局長をはじめとする本学教職員とが一同に会して親睦を深めることを目的としており、今回は留学生約140名に加え、日頃から留学生をサポートしている支援団体、各国大使館及び自治体等関係者、及び本学教職員の総勢340名の参加がありました。

会は佐々木総長の挨拶、小宮山副学長による乾杯の音頭で幕を開け、中盤には本年3月に大学院人文社会系研究科修士課程修了予定の朴姫淑（パク ヒスク）さん（韓国）、大学院医学系研究科博士課程修了予定の金宣和（キム スンファ）さん（韓国）、大学院農学生命科学研究科博士課程修了予定のベガム ローシャン アラさん（バングラディッシュ）の3名から日本での経験、研究生生活などにちなんだ流暢なスピーチがあり、引き続き在学生 ニルカムハン スパワンさん（大学院農学生命科学研究科博士課程・タイ王国）によるタイの弦楽器（ソー）の演奏、ゼラファ セドリックさん（大学院工学系研究科修士課程・マルタ）を中心とする在学生6名のグループによる合唱が行われ、会場は一層和やかな雰囲気に包まれました。

多くの国・地域から集まった留学生同士、各国大使館及びに支援団体の方々が、教職員と写真を撮り合う等、更に交流が進み、19時半過ぎに本学留学生センター長の飯塚教授（大学院農学生命科学研究科）から閉会の挨拶があり、会は盛会のうちに終了しました。



総長と留学生

(研究協力部留学生課)

「東京大学外国人留学生スキー講習会」開催される

本学スキー部・スキー部OBの多大な協力をいただき、通算で5回目となる外国人留学生スキー講習会（2月20日（金）～23日（月））が開催されました。

2月20日（金）深夜、多数の応募者の中から抽選で選ばれた30名の留学生は本郷キャンパスを後にし、翌日午前6時に白嶺荘（東京大学運動会スキー部宿泊施設）に到着しました。一行は到着するとスタッフ手作りのミネストローネの朝食で出迎えを受け、開校式を経て、柵池高原スキー場で講習会が開始されました。参加者の大半が初心者のため、講習はスキーの担ぎ方から始まりましたが、コーチ陣の懇切丁寧な指導により、午後には全員が緩斜面のコースを滑り降りることができるようになりました。



スキー部講師と留学生

2日目は、スキー講師の熱意あふれる指導と練習の成果により全員に上達がみられ、さらに上級のコースに挑戦する者もいました。2月21日（土）、22日（日）の両日ともこれ以上ない好天に恵まれたことは参加者全員にとって本当に幸運でした。

2月22日（日）の夕食では、手打ちうどんの実演が催され、参加留学生自らが打ったうどんに舌鼓を打ちました。続いて行われた懇談会の最中には、当日誕生日を迎えた留学生に対し各国語によるバースディ・ソングと共に祝杯があげられるなど、スキー部関係者や各スタッフの方々の間で、和やかな中にも活気溢れる交流が延々と続きました。

最終日に交流の一環で訪問した村小谷中学校では、全校生徒から拍手で歓迎を受け、小林三郎校長の挨拶に続き留学生の母国並びに自己紹介が行われた後、生徒から地域の特色や学校の紹介などがあり、国際理解と交流を深めました。最後は1年生の生徒達とのお茶会が開催され、打ち解けた和やかなムードで幕を閉じました。小谷中学校の皆さんと記念撮影を行った後、見送りを受けた一行は名残を惜しみつつ同校を出発し、18時頃本郷キャンパスへ到着しました。



小谷中で母国の紹介をする留学生

この講習会を無事に実施することができたのは、本学スキー部関係者、ボランティアの数年にわたる真に多大なる御協力と優れた企画力及び小谷中学校関係者、生徒達の御厚意と御協力、更に本会を支えていただいている会員各位の御支援の賜物であり、ここに心から御礼申し上げます。

（研究協力部／東京大学外国人留学生後援会）



2003年度冬学期留学生センター日本語教育集中コース・特別コース（第37期生）の修了証授与式行われる

留学生センターでは、昨年10月から本年度冬学期を開講していたが、このほど、全日程を終了し、2月20日（金）15時30分から、医学部図書館333号室において、集中コース・特別コースの43名の修了者に対する修了証授与式を行った。

式には、小宮山副学長のほか、関係教官らが列席、飯塚留学生センター長の挨拶に続いて、修了者ひとりひとりに飯塚センター長から修了証が手渡された。

続いて小宮山副学長から祝辞が述べられ、副学長は、半年に渡るコースをやり遂げたことをねぎらったあと、上達した日本語に対する賛辞を述べて、修了を祝うとともに、この日をひとつの区切りとして一層励むよう修了者たちに呼びかけた。



祝辞を述べる小宮山副学長

留学生センター菊地教授の講評のあと、各クラスの代表者が日本語でスピーチを行い、来日当初の日本での生活や日本語学習への不安な気持ち、それを克服した喜び、いろいろな国からのクラスメートとの楽しい思い出や、これから本格的に研究に取り組むことへの抱負などが語られた。

和やかな雰囲気の中に式は終了し、引き続き山上会館にところを移して、修了者を囲んでの懇談会が開かれた。これには修了者の指導教官も参加し、修了者たちは、クラスごとに教官を囲んで写真撮影をするなどしながら、日本語で歓談し、互いに修了を祝い、別れを惜しんだ。

なお、今期の修了者43名の所属と出身は以下の12研究科、22ヶ国（または地域）である。

法学政治学研究科	4名
医学系研究科	2名
工学系研究科	7名
人文社会系研究科	2名
理学系研究科	2名
農学生命科学研究科	10名
経済学研究科	1名
総合文化研究科	7名
教育学研究科	2名
数理科学研究科	2名
新領域創成科学研究科	1名
情報理工学研究科	3名

韓国	4名	アメリカ合衆国	3名
中国	9名	ブラジル	1名
フィリピン	1名	ノルウェー	1名
インドネシア	1名	イギリス	1名
マレーシア	1名	フランス	2名
タイ	4名	オーストリア	2名
シンガポール	1名	ポーランド	1名
ネパール	2名	ハンガリー	1名
バングラデシュ	3名	セルビア・モンテネグロ	1名
スリランカ	1名	ロシア	1名
モンゴル	1名	スロベニア	1名

各クラスの代表者によるスピーチ

クラス1代表

OH CHUNG SIK（オウ チュンシク）
（韓国 理学系研究科）

先生方、留学生センターのみなさん、こんにちは。

私は韓国のオウともうします。今日は、クラス1のことをお話ししたいと思います。

私たちは去年10月に日本へ来ました。でも、日本語がぜんぜん分からないので、成田空港に着いたときから問題がたくさんおこりはじめました。

10月21日から留学生センターでの日本語のクラスがはじまりました。一番きほんてきなひらがなからはじめて、カタカナ、漢字、そしてかんたんなぶんしょうを勉強していきました。Conversation challengeの時間にはNTTに電話をかけて電話番号をきいたり、いろいろなところに電話して知らないことをきいたりしました。そして、作文の時間や会話の練習時間などにはみんなじぶんの国を紹介して、日本とちがうところを話しました。それから、さいきんの presentationの時間にはじぶんの国から持ってきたものを紹介しましたが、それで、みんなの国についてよく分かるようになりました。いつかきかいがあったら、一緒に勉強した友だちの国へ行ってみたいと思っています。

日本語のじゅぎょうはたいへんでしたが、私たちはまじめに勉強しました。それで、今はかんぺきじゃないで

すが、すこし日本語が分かります。はじめは先生たちの話を聞くことがむずかしかったですが、今は先生たちのユーモアを聞いてわらうこともできます。そして今、この時も日本語がだんだんもっと上手になっていると思います。

私たちのクラスには学生が8人いました。スリランカのランシリニさん、タイのシリラットさん、ネパールのカルパナさん、バングラディシュのシャヒナさんとナスさん、ポーランドのクリスさん、中国のフーさん、それから私です。私たちはいつも元気で、じゅぎょうはたのしかったです。そして先生たちもいつもわらって親切に、おもしろく日本語を教えてくださいました。

日本語のクラスは私たちにとってほんとうにいい時間でした。日本語のクラスの楽しかった時間をわすれないと思います。先生方、留学生センターのみなさん、どうもありがとうございました。これからもどうぞよろしくおねがいします。

クラス1S代表

謝賓 (XIE BIN シャー ヒン)
(中国 数理科学研究科)

先生、皆さん、こんにちは。

私はクラス1Sの代表、謝賓と申します。中国人です。専門は数理科学です。私は去年の十月にはじめて東京に来ました。これからクラス1Sのことをお話ししたいと思います。

今回クラス1Sには十一人の学生がいて、五人が中国から、ほかのクラスメートはいろいろな国から来ました。タイのカノクオンさん、バングラデシュのサデクさん、インドネシアのアリフさん、ネパールのポウデリさん、モンゴルのバヤルさん、フィリピンのアシスさん、中国のトウランさん、周さん、トウメイさん、コウさんです。今、私たちはいい友だちになりました。楽しくて、幸せだったと思っています。

私は四か月前には日本語を全然知りませんでした。それで、東京に来た時、とても困っていました。たとえば、どこでどうやって電車の切符を買うか、どこで安く買い物できるか、わかりませんでした、専門のクラスもわかりませんでした。ですから、日本語の勉強はとても必要でした。去年の十一月に、クラス1Sで日本語の勉強が始まりました。先生方はとてもやさしくて、親切で、教えるのが上手なので、私たちは日本語に興味を持ちました。毎日たくさん新しい単語と文法を勉強して、たくさん会話を練習しました、ときどき楽しいゲームもしました。今は友だちや先生と日本語でやりとりできるようになりました。クラス1Sはとても楽しかったです。だから私たちの日本語ははやく進歩しました。

日本語を勉強しなくちゃいけませんでしたが、おもしろいけんもしました。東京のいろいろなところへ行きました。それから、日本人の友だちができました。会

社ではたらいっている人や、親切でやさしい先輩や同級生たちです。たくさん日本の人たちのおかげで、私は日本の生活や文化を知りました。もっと日本の文化を知るために、私は春休みにホームステイをするつもりです、そしてたくさんいい友だちを作りたいと思います。

先生方、事務室の皆さん、ほんとに今学期はたいへんお世話になりました。これからもよろしくお願ひします。やさしいクラスメートのみなさん、一緒に勉強できて、楽しかったです。どうもありがとうございました。

クラス2代表

EGLINTON ANDREW WILLIAM(エグリントン アン
ドリュウ ウィリアム)
(イギリス 総合文化研究科)

みなさん、こんにちは。アンドリューと申します。今日はクラス2を代表してスピーチをしたいと思います。よろしくお願ひします。

まず、クラス2のメンバーを紹介します。タイ出身で電子工学専門のアニワットさん、同じく電子工学が専門でブラジル出身のラファエルさん、ノルウェー出身で建築専門のツールさんと、イングランド出身で演劇が専門の私です。4人だけの小さなクラスだったので、すぐにみんな仲良くなりました。

私以外の3人は、去年の10月に日本に初めてやってきました。私の場合は、留学生になる前は横浜の中学校で英語の教師をしていました。ですから、三人に比べて日本の生活にある程度は慣れていたのですが、日本語をきちんと勉強するのは初めてだったので、授業についていくのはとても大変でした。毎日、新しい文法・漢字・表現などをたくさん覚えなくてはならず、時々頭がぼくはつしそうになりました。でも、先生が皆さん熱心に、おもしろく教えてくださいましたので、がんばることができました。

大変なこともありましたが、新しい発見や楽しい経験もしました。毎日少しずつでも日本語が分かるようになって、日本人と会話ができるようになっていくことが感じられてうれしかったです。

またクラス全員が違う国から来ていたので、ほかの国の文化や生活を知るよい機会となりました。例えば、タイ人がみんな辛い食べ物が好きではないこと、ブラジル人が必ずサッカー・ファンではないこと、ノルウェー人だからといってスキーが得意ではないこと、イングランドにも少しはおいしい食べ物があることなどを話し合っ

て、冗談を言ったりもしました。5ヶ月間の集中コースは長いと思ったこともありましたが、とても忙しく過ぎていきました。この時間をみなさんと一緒に過ごすことができ、幸せに思います。またクラス2を教えてくださいました先生方、本当にお世話になりました。

春からも日本語の勉強を続けながら、専門の研究に力

を入れていきたいと思っています。皆さん、ありがとうございます。そして、これからもよろしく願います。

クラス3代表

OBRIST NAOMI CRISTINA(オブリスト ナオミ クリスティーナ)
(フランス 人文社会系研究科)

今回、クラス3の学生は六人で、一方先生は十人なので、最初の日はとても驚きました。フランスではそれはとても珍しいことです。確かに大勢の先生に日本語を習うのはとてもいいことです。それぞれの教え方も違うし、一週間に一度ずつ先生に会えることも、一つの楽しみでした。先生方も私達と同じように、むしろ私達よりも努力して、頑張っって日本語を教えて下さったので、皆とても感謝しています。

学生はフランスのバステアンさん、マレーシアのリムさん、ロシアのアンナさん、イギリスのヘンリさん、一月から入学試験の準備のため授業に来なくなったカナダのオリビエさん、そして私の六人でした。

十二月のある月曜日のことでした。本郷先生の授業で会話を練習するために、それぞれ日本のどこかの会社に電話をしました。バステアンさんは飛行機会社に電話をして、その場で自分の予約が取り消されていたことが分かりました。彼の驚いた顔を忘れません。しかし、日本人の相手がフランス語で話し始めても、バステアンさんは最後まで日本語で頑張りました。その後どの先生もバステアンさんが国へ予定通り帰れるかどうかを心配して下さいました。ただ先生としての役割だけではなく、私達に対して家族みたいに気をつけて下さいましたので、皆とてもありがたく思っています。

もしマレーシアのリムさんがいなかったら、クラス3はとても寂しかったでしょう。日本に来る前は一年中半袖で、雪を見たことがなかったリムさんは、冬休みに北海道にホームステイをしました。A型の静かな真面目なリムさんは専門のクローンについて面白い発表をしてくれました。

ロシアのアンナさんは私とは寮で隣どうしで、毎朝一緒に通ってきたので、とても親しくなりました。アンナさんのおかげで、皆ロシアの伝統や彼女の専門である日本の着物の模様について詳しくなりました。アンナさんが着物を着て発表をしたのを皆覚えていていると思います。

最後にイギリスのヘンリさんを紹介します。彼はヴァイオリニストとしても活動しているし、将来の英語の教科書を研究しています。二月の四日に、同じ日に生まれたヘンリさんと内村先生の誕生日を同時にクラスでお祝いしました。その機会に先生の年が分かりました。「見当をつける」ということばは、教科書で習った表現のなかで私達が一番よく覚えて使っていたのですが、内村先生の年については、私達の見当は外れてしまいました。

クラス3は皆とても仲が良くて日本語の勉強にも役に

立ったと思います。仲間とも先生とも別れるのが寂しいですが、クラス3のいい思い出でいっぱいなので、これからはそれぞれ日本語の勉強を続けることができると確信しています。ありがとうございました。

クラス4代表

KOH YANG WEI PATRICK (コー ヤン ウェイ パトリック)
(シンガポール 総合文化研究科)

こんにちは。私の名前はパトリックと申します。よろしく願いいたします。まず、クラス4を代表して、先生がたに感謝いたします。とても楽しい4か月間でした。短い時間ですが、先生がたのおかげで、日本語だけではなく、日本の習慣や文化をいろいろ学びました。しかし、学生が鈍いので、先生がたは大変だったと思います。

クラス4は国際的なクラスです。そして、クラスメートの専攻分野もとても広いです。国際法から、経済、電子工学にわたって、皆、多様な研究をしています。留学の目的は学位を取るだけではなく、いろいろな国や分野の人と話したり、一緒に問題を考えたりすることです。私はクラスメートと楽しく勉強しました。特にオーストリアのStefanさんとドイツのThomasさんが私にくれた印象が一番深いです。StefanさんとThomasさんとの会話を通じてヨーロッパのことが少しずつ分かるようになりました。そして、自分の国とほかの国の共通点を見つけた時はなんとなくうれしかったです。

授業ではときどき教科書以外の読み物も読んでいました。それは面白かったです。特に、二通先生が探してくださった、例えばイグ・ノーベル賞についての新聞記事は、私たち学生にとって、とても役に立ったと思います。新聞記事からたくさんの実用的な単語を勉強しました。それは今後の研究とか日本での生活とかに重要なことだと思います。でも、クラス4は真面目なだけのクラスではありませんでした。毎週の月曜日はいつも優しい大島先生を困らせました。しかし、大島先生は平気でした。大島先生はよく新たに勉強した単語で面白い文を作って、皆を笑わせました。大関先生はいつも一生懸命学生の質問に答えて、学生が理解できるまで頑張ってくださいました。さらに、学生が疑問がありそうときは、それを察して、ほかの言い方を探して、説明を加えてくださいました。大場先生は一番面白い先生です。授業のときよく教科書の内容からそれて、別の話をしてくださって、とても面白かったです。別の話がきっかけで、教科書にない日本語らしい文法や単語を勉強しました。このように学んだものは一番覚えやすいと思います。

今日は日本語の集中コースが終わります。しかし、私たちの日本語の勉強が終わるわけではありません。日本にいるあいだに、できるだけチャンスをつかんで綺麗な日本語を深く勉強したいと思います。これで、私のスピーチは終わります。ご清聴ありがとうございました。

クラス5代表

KO JUNG SAM(コウ ジョン サム)

(韓国 法学政治学研究所)

クラス5を代表してスピーチをさせていただくコウジョンサムと申します。韓国から参りまして、現在、法学部研究生として行政学を専攻しております。

クラス5は、今学期四人いました。一人はヨーロッパのスロベニアから来たベルさんです。彼は背も高くて男らしく見えますが、日本語の話し方は意外にやさしいです。でも、国際関係の知識はクラスメートをびっくりさせるほどでした。そして、中国から来た二人のうち、男性のファンさんは、光ファイバーを研究する工学系の院生です。彼はいつも自分の小さい自転車を車だと主張しました。そういえば、自転車も車ですね。もう一人は、法学部で民法を専攻するチョウさんです。彼女は、現在、結婚のために国へ帰りました。皆さん、彼女の結婚を祝福してください。

授業は、一週間に3日、100分ずつ行われました。主に新聞記事・小説・エッセイ・論文などを読みながら、意味を把握したり、重要な文法をチェックしたりした後、討論する方式でした。集中して読まなければ先生の鋭い質問に答えることができないので、いつも、緊張を維持しなければならなかったです。最初、クラスメートは、沈黙は金だという信念を持っているかのように、あまり話しませんでした。だんだん授業の雰囲気慣れて、自分の意見や主張を積極的に話すようになりました。結局、授業が進まないほどお互いに夢中になって話し合ったこともあり。いま振りかえって見ると、日本語を多く話せるように導いてくださった先生方のご配慮だと思います。

このように、各国から来た留学生たちが同じ場所に集まり、授業を通して各国の色々な事情について理解し合うようになりました。すなわち、クラス5の授業はスロベニア、中国、韓国、日本を連結する架け橋の役割を十分に果たしたと思います。クラスメートはその橋の上で親しくなりました。お互いの文化の違いを克服するには、少しずつ譲り合い、理解し合うのが重要です。そのような面から見ると、留学生センターの授業は世界の平和にも資しているといえるでしょう。

授業を担当してくださいました菊地先生、大島先生、増田先生、藤城先生に心からの感謝を、クラス5の全員からお伝えします。

みなさん、将来、夢を実現したところで、この半年間を思い出して、改めて実感する日がくるでしょう。ここでの授業がいかに大切でありがたかったかを。

特別コース代表 MUSULIN ILJA (ムスリン イーリャ)

(セルビアモンテネグロ 総合文化研究所)

みなさん、今日は。特別コースのムスリンと申します。

セルビアモンテネグロからまいりました。日本の古典文学の研究をしております。

さて、まず特別コースはどういうコースだったかをみなさんにご紹介するために、その内容と参加者について話させていただきます。

特別コースでは、接続・引用・文末表現などといった文法事項をもとに、分類・定義・対比・問題提起というような、学術論文を書く上で必要不可欠な論理的な要素を学びました。

私たち学生は、先生方に丁寧に教えていただいた論文の構造、論文でよく使われる表現を、これから研究の中で有効に生かすように頑張っていくつもりです。

特別コースを担当してくださった二通先生と増田先生に、私たち学生は多大なご苦勞をお掛けしてしまいました。私たち特別コースの学生は、宿題の問題の内容を書きやすいように自分の都合よく解釈したり、それでもうまく書けなかった時には宿題のタイトルまで勝手に変えたりする、やや個性の強い、特別なクラスでした。また、わたしたちのクラスには、法学・医学・心理学・文学・社会学など、異なる専門分野を専攻する学生がいました。しかしながら、先生方はこの多種多様にうまく対応してくださいました。両先生は私たち言葉の法律である文法を教え、間違いという私たちの日本語の病気を治し、日本語の知識不足からくる私たちの悩みを取り払い、私たちの日本語をより美しいものにし、さらに、私たちが日本の社会において支障なく生活するのに必要な言葉を教えてくださいました。先生がたはそれぞれの学生の要求に応え、私たちが満足できるような授業を実現してくださいました。

学生達が難しい問題に直面すると、先生方は直ちに細かく、根気よく答えを教えてください、私たちががっかりさせずに最後までうまく導いてくださいました。特別コースはレベルが高いだけに難しい部分もあったかと思いますが、両先生の巧みなご指導のもとで私たちは荒波を超えて向こう岸に無事に到達することが出来ました。

私たち学生が研究の中で下手な論文を書いた場合、もはや日本語の知識不足を口実に出来ないほどいい授業を教えてくださいました二通先生と増田先生に、そして、親切にしてくださいました留学生センターの事務所のみなさんに、特別コースの学生たちを代表して心から感謝の意を表したいと思います。誠にありがとうございます。

最後に、私から個人的に申し上げたいことがあります。日本語が専門ではないのに驚くほど日本語が上手なクラスメートの前で、日本語科を卒業した私は肩身の狭い思いをしました。韓国のシンさんとキムさん、中国のリーさんとユーさん、アメリカのトーマスさん、そしてオーストリアのサーシャさん、あなたがたのお陰で私は自分の日本語の勉強不足に気が付きました。インスピレーションを与え、力を引き出してくれるようなクラスメートに恵まれて、自分のことを本当に幸運だと思いました。感謝しています。

どうもありがとうございました。
以上です。



修了証を手に一同で記念撮影

(留学生センター)

≪ 部局ニュース ≫

退官教官の最終講義

このたび、本学を退官される方々の最終講義・講演等の日程と題目をお知らせ致します。

地震研究所

東原 紘道 教授 3月26日(金) 13:30~
(地球計測部門) 地震研究所第一会議室
「地震問題への工学アプローチ」

分子細胞生物学研究所

大坪 榮一 教授 3月22日(月) 16:00~17:30
農学部2号館 第一講義室
「DNA伝達と転移メカニズムの探求」

アジア生物資源環境研究センター

飯山 賢治 教授 3月23日(火) 16:00~
農学部5号館105号室
「資源環境学との出会い」

No.1282でお知らせしました最終講義の日時を、下記のとおり変更いたします。

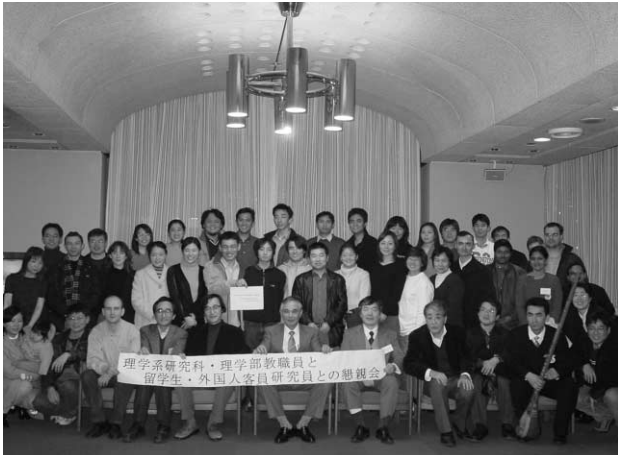
地震研究所

兼岡 一郎 教授 3月26日(金) 13:30~
(地球ダイナミクス部門) 地震研究所第一会議室
「同位体・地球・進化 - マントルを巡って30年」



理学系研究科・理学部教職員と留学生・外国人研究者との懇親会

1月26日（月）18時から山上会館1階談話ホールにおいて理学系研究科・理学部の教職員と留学生・外国人研究者との懇親会が開催され、留学生・客員研究者とその家族、チューターの日本人学生、教職員、合わせて60名余りの参加者があった。会は岡村大学院理学系研究科長・理学部長の日・英二ヶ国語による歓迎の挨拶に始まり、坂野国際交流委員会委員長の乾杯の音頭の後、歓談が始められた。



参加者記念撮影

会半ばに留学生と研究員のスピーチが行われ、物理学専攻の大学院外国人研究生クンプカル・プティクさん（インド、男性）は日本に留学し、初めはどのようなことが不安な気持ちでいたが、多くの方が支えてくれたお陰ですぐに日本での研究生活にも慣れ、また理学系研究科日本語教室で日本語を学べて大変良かったことや、日本の印象で特に地下鉄は素晴らしいとのスピーチを日本語で行った。来日時には全く日本語を知らなかったプティクさんだが、わずか1年半の滞在中に日本語を学び心温まるスピーチを披露したことは感動的であった。物理学専攻の客員研究者ダンジェロ・マリーさん（フランス、女性）は、留学したことで見えてきた日本の文化や日本人とフランス人のコミュニケーションの違いについて語ったが、私達が普段何気なく行っている1つ1つの動作にもいろいろな見方があるのだということに気づくことが出来、大変興味深かった。スピーチの後は、麗澤大学で学ぶ留学生、ママトニヤズさんによるウイグルの民族音楽の演奏があり、タンブルという民族楽器の美しい響きとアンコールにこたえての見事な日本の曲の演奏に、会場は拍手喝采であった。この演奏は天文学専攻の修士課程に在籍するレテプ・エハメティさんがママトニヤズさんの友人であった縁で実現することが出来た。そして地球惑星科学専攻の大学院外国人研究生ザイ・チュウミンさん（中国、女性）がアカペラで中国の民謡を披露し、また総務補佐が留学生と外国人研究者へ日本式のエールを送るなど、嬉しい飛び入りのパフォーマンス

が懇親会をさらに盛り上げた。

会の終わりには参加者全員でみんなの一体感とスキンシップを図れるゲームを行い、優勝チームには研究科長との昼食会という豪華商品が贈られた。化学専攻で国際交流委員会委員の梅澤教授による閉会の辞が英語で行われ全員で記念写真の撮影の後、盛況のうちに閉会した。研究科長の挨拶にもあったように、この、年に一度の懇親会を期に多くの交流の輪が広がることを願っている。



腕相撲（？）

（大学院理学系研究科・理学部 国際交流室）



東京大学生産技術研究所合同講演会「リサーチインテグレーションと産学連携」開催される

生産技術研究所では、1月28日（水）、駒場エミナーズ（目黒区駒場）において、生研学術講演会・産学連携フォーラム合同講演会が「リサーチインテグレーションと産学連携」と題して開催され、産業界などから300名を超える参加者があった。例年、個別に開催してきた学術講演会と産学連携フォーラムであったが、本年は、法人化を控えての将来メッセージの発信の場と位置付け、合同開催に踏み切った。

午前の部では、西尾所長の開会挨拶、浦企画運営室長のリサーチインテグレーションの主旨説明に続き、各リサーチインテグレーションの説明が行われた。

午後の部では、文部科学省研究振興局田中課長、経済産業省産業技術環境局窪田課長より、各省の産学連携施策と生研への期待について講演があり、西尾所長からこれに呼応する生研のスタンスと新しい産学連携形態についての説明があった。

今回の合同講演会のひとつの目玉は、産業界から招いたパネリストと生研教授によるパネルディスカッション「生研と産業界の新たな連携にむけて」であった。生研側から、現在の生研の産学連携体制と法人化後の東大の知財管理などについて説明が行われると、産業界からは、従来型の産学連携の問題点が指摘され、さらに産業界と共に未来を開拓し牽引していく生研へのより一層の期待感とエールが寄せられた。

会場からも、産学連携から公共事業に代わるビジネスチャンスを、といった要望が寄せられ、法人化を目前に控えた生産技術研究所の社会的役割と責任を強く実感させられるとともに、本年が、生研の産学連携活動におけるひとつのマイルストーンになるという予感が強く感じられた。

今回の合同講演会は企画段階から、教官と事務方担当者が一致団結した体勢で準備を行い、実を結んだ。法人化へ向けて組織としての一体感をはぐくむ大切なステップともなった。

(生産技術研究所)

東京大学物性研究所所内技術職員研修「安全管理・衛生管理技術関係」行われる

平成15年度東京大学物性研究所所内技術職員研修「安全管理・衛生管理技術関係」が、1月28日（水）、30日（金）、2月4日（水）に開催された。

本研修は、国立大学の法人化移行に向け、柏キャンパスの全構成員を対象に安全・衛生管理の基本的な知識、考え方を取得させ、意識の向上を図るという目的で実施された。

初日は、物性研究所大講義室において、労働基準監督署、JFEスチール株式会社、環境安全研究センターから講師を招き、労働安全衛生法の概要、民間企業の安全・衛生管理手法及び化学物質の取り扱いによる健康への影響等について講義が行われ、引き続き活発な意見交換が行われた。

2日目は民間企業における安全管理・衛生管理の実情を学ぶため、JR東日本 大宮工場とJFEスチール株式会社を、3日目には柏市内の（株）オリエンタルモータと（株）日立メデイコを訪問し、現場研修を行った。現場研修先では、各企業の安全衛生管理に対する取り組みについての講義後、主要工場や研究所内の見学を行った。



JR大宮工場見学風景

3日間の講義と現場研修を通じて、国立大学法人移行後の各研究室における「安全管理・衛生管理」に対する取り組みについて、参加者一同、非常に勉強になった研修であった。

(物性研究所)

博物館公開セミナー「石の記憶」展にちなんで

2月19(木)、20日(金)に総合研究博物館では、現在開催中の「石の記憶」展にちなんで公開セミナーが下記のとおり行なわれた。セミナーでは今回の展示を、被爆調査団、写真、被爆地としての広島、フィールドワークという様々な視点から講義した。2日間でのべ100名ほどが参加し、受講者は「科学者の立場からの被爆を知ることができ、感慨深いものがあった」「フィールドワークの苦労がわかって感激した」などと感想を残した。

2月19日(木)

「はじめに」

(田賀井篤平・本館教授)

「日本の原爆研究と被爆調査団」

(橘由里香・大学院理学系研究科・博士課程)

「爆心に入る一写真家林重男と広島・長崎調査団一」

(井手三千男・写真家)

2月20日(金)

「記憶されない広島」

(木下直之・大学院人文社会系研究科・助教授)

「被爆資料のフィールドワーク」

(田賀井篤平・本館教授)



セミナーの様子

(総合研究博物館)

≡ 掲示板 ≡

東京大学法科大学院開設記念連続公開講演会 「司法制度改革のゆくえ」第4回

東京大学法科大学院開設記念連続講演会も4回目を迎え、また、4月から法科大学院がスタートすることとなりました。今回は、司法制度改革推進本部知的財産訴訟検討会の委員の方にご参加いただき、ミニシンポジウムの形で開催します。

開催日：4月15日(木) 13:00~16:00

場 所：法文1号館25番教室

参加等：自由参加

演 題：知的財産保護と司法の役割

講演者：阿部一正(新日本製鐵株式会社知的財産部長)

飯村敏明(東京地方裁判所判事)

末吉 互(弁護士：森・濱田松本法律事務所)

大淵哲也(大学院法学政治学研究科教授)

中山信弘(大学院法学政治学研究科教授)

主催 大学院法学政治学研究科ビジネスローセンター

後援 法学協会

(次回予定 5月20日(木))

(大学院法学政治学研究科・法学部)

≡ 事務連絡 ≡

人 事 異 動 (教 官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
		(辞 職)	
16. 2. 29	古 川 洋 一	辞 職	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター
		(採 用)	
16. 3. 1	坂 井 克 之	大学院医学系研究科助教授	英国 Institute of Neurology HFSP長期リサーチフェロー
〃	和 田 一 実	大学院工学系研究科教授	マサチューセッツ工科大学マテリアルズ工学科マテリアルズプロセッシングセンター主幹研究員
〃	武 田 史 子	大学院工学系研究科助教授	横浜市立大学商学部助教授
〃	上 田 貴 志	大学院理学系研究科助教授	独立行政法人理化学研究所研究員
〃	新 井 富 雄	大学院経済学研究科企業・市場専攻会計・財務講座会計財務開発研究分野教授	株式会社野村総合研究所研究理事 (財) 野村マネジメント・スクール研究理事
〃	HANNAH LESLIE	大学院経済学研究科教授	アッシュレジ・ビジネススクール学長
〃	船 津 高 志	大学院薬学系研究科教授	早稲田大学理工学部物理学教授
〃	林 香 里	社会情報研究所助教授	バンベルク大学客員研究員
〃	加 藤 岳 生	物性研究所物性理論研究部門計算物性物理研究領域助教授	大阪市立大学大学院工学科・工学部講師
		(昇 任)	
16. 2. 4	西 山 賢 一	分子細胞生物学研究所助教授	分子細胞生物学研究所助手
16. 2. 16	高 田 毅 士	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科助教授
〃	九郎丸 正道	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科助教授
〃	堀 正 敏	大学院農学生命科学研究科助教授	大学院農学生命科学研究科助手
〃	大久保 靖 司	保健管理センター助教授	千葉大学大学院医学研究院助手
16. 3. 1	浅 野 知一郎	大学院医学系研究科助教授	医学部附属病院助手
〃	渡 邊 聡	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科助教授
〃	赤 石 美 奈	大学院工学系研究科助教授	北海道大学大学院工学研究科助手
〃	島 野 亮	大学院理学系研究科助教授	大学院工学系研究科助手
〃	河 鱈 実 之	大学院農学生命科学研究科助教授	大学院農学生命科学研究科講師
〃	高 田 康 民	物性研究所物性理論研究部門複雑系科学研究領域教授	物性研究所助教授
〃	勝 本 信 吾	物性研究所先端領域研究部門先端物性研究領域教授	物性研究所助教授
〃	高 橋 敏 男	物性研究所先端分光研究部門先端分光物性領域教授	物性研究所助教授
〃	廣 井 善 二	物性研究所附属物質設計評価施設計算物性科学領域教授	物性研究所附属物質設計評価施設助教授
〃	佐 藤 克 文	海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター助教授	国立極地研究所研究系助手
〃	鈴 木 良 實	環境安全研究センター助教授	環境安全研究センター助手
		(配 置 換)	
16. 2. 16	玉 木 賢 策	大学院工学系研究科教授	海洋研究所教授
16. 3. 1	山 本 博 資	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院情報理工学系研究科教授

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
16. 3. 1	桑 原 誠	(転 出) 九州大学大学院総合理工学研究院教授	大学院工学系研究科マテリアル工学専攻機能システム講座先端応用材料学領域教授
〃	後 藤 英 司	千葉大学園芸学部助教授	大学院農学生命科学研究科助教授
〃	原 田 繁 春	京都工芸繊維大学繊維学部教授	大学院薬学系研究科助教授
16. 3. 1	岩 崎 晃	(転 任) 大学院工学系研究科助教授	独立行政法人産業技術総合研究所主任研究員
〃	横 井 浩 史	大学院工学系研究科助教授	北海道大学大学院工学研究科助教授
16. 3. 1	桑 原 誠	(併 任) 大学院工学系研究科教授	九州大学大学院総合理工学研究院教授

人 事 異 動 (事務官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
16. 2. 29	荒 井 智 典	辞 職	農学系学術国際課研究協力掛長 農学系学術国際課国際交流掛長 (併)



原 稿 募 集

「学内広報」に学内の情報をお寄せください。

- ・文字数 800字以内（写真がある場合は、文字数を控えめにしてください。）
- ・写真には、キャプション（説明文）を添えてくださるようお願いいたします。

「学内広報」には、みなさんから投書を寄せていただく欄として「噴水」、東京大学と社会との連携・協力情報を紹介するための欄として「窓」が設けられています。これらの欄への投書要領は次のとおりです。

「噴水」

- 1 本学における教育・研究活動等に関する意見を述べたものであること。
- 2 個人の投稿で所属・氏名を明記したものであること。
- 3 他者への非難・攻撃を含まないものであること。

「窓」

「東京大学とその周辺地域の歴史」、「学外機関より本学構成員への表彰」、「学外の方からの東京大学に関する意見」など、東京大学と社会との関係に関する情報であること。

以上の要件をそなえるものの中から、広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

送り先 東京大学事務局総務部総務課広報室

03-3811-3393 内線：82032、22031、 FAX：3816-3913

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

◇広報室からのお知らせ

平成15年度「学内広報」の発行日及び原稿締切日を、東京大学のホームページに掲載しました。

URL: <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

生命融合科学と世界の中の東大

私は、遺伝子工学発祥の地であるスタンフォードを経て、ヒューストンに滞在している。私が外部評価委員をつとめるテキサス大学のMD Anderson Cancer Centerは1千人の研究者と1万3千人の医療スタッフを擁し、癌の臨床ではトップクラスのメディカルセンターである。細胞増殖、シグナル伝達、ゲノム医科学、個の医療、トランスレーショナル・リサーチなど、癌の診断・治療・予防戦略の討議を通して、過去30年間に医科学と医療産業に生じた革命的变化を再確認すると同時に、医学部と医科学研究所を擁する東京大学が、託された使命に答えてきたのか、新たな時代の使命をどのように果たしてゆくのか自問している。

私は37年前に医学部を卒業したが、当時、出会ったいくつかの事柄がその後の私の進路を規定した。その一つにベルツの言葉がある。20年余にわたり教授をつとめたベルツは100年前、日本を去るにあたり「私は日本で科学という樹を育てるために努力したが、日本人はその成果である果物だけを欲したのである」と述べた。切り花ではない、生命科学という成長する樹を育てることが私の目標となった。

もう一つは、生命科学における分子生物学で



ある。すでに染色体の複製や遺伝暗号など分子生物学の基本的な概念は大腸菌で解明され、大腸菌で正しいことはゾウでも正しい、というのが研究者の指針であった。しかし分子生物学の知識をヒトに適用し、研究成果を患者に還元するには大きな溝があり、私は医科研を基礎と臨床の橋渡しをする場として選択した。大腸菌とヒトを隔てる溝は、数年後にスタンフォード大学で開発された遺伝子操作技術により急速に埋められ、私と妻はシリコンバレーを研究開発の場とすることになった。

私が自分の興味にもとづいて研究課題を設定しそれに適した研究の場を求めて自由に行動できたのは、教養学部以来、東大で培った人々との出会いが基礎になっている。

これまでを顧みて私は、既成の概念を超える成果を生み出し、絶えず自己を超える場と人材を育てることこそ東大の役割があると確信している。日本の近代化は、西欧の技術は導入するが人間は入れないという和魂洋才と、貧しいアジアではなく西欧と交流する脱亜入欧という矛盾を抱えたまま出発したが、こうした姿勢では科学技術創造立国の達成は絵に描いたモチに終わりかねない。有限の資源を巡る争奪戦から、無限の価値を作る科学技術の競争に移行した21世紀において、東大が世界の人材を集めアジア太平洋地域の知的ハブとして飛躍することを願っている。(医科学研究所 新井賢一)

(淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

[訂正]

「学内広報」No.1282 (2004.2.25) において一部誤りがありましたので、訂正して、お詫びします。

20ページ右段26行目

(誤) 福山 秀 → (正) 福山 透

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No 1284

2004年3月10日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index-j.html>